

総括

木下尚子

本研究は、3～7世紀の集団墓地である広田遺跡のこれまでの発掘調査成果をもとに、考古学、人類学、ならびに実験的復元の方法によって、広田人とその文化の復元を目指した共同研究である。すでに公表されている土器、貝符、人骨を対象として再度の調査を実施し、その過程で発見された若干の資料も加えた。調査・研究は土器班、貝符班、人類班に分かれて独立的に進め、年度初めに相互の交流をはかった。以下に3班における成果をまとめ、本研究を総括したい。

1. 土器とその移動

1.1. 研究の方法

広田遺跡で出土した貝製装身具の素材の多くは、奄美・沖縄地域に産する巻貝である。広田人は明らかにこれらの島々と関係していた。広田遺跡の前半期（3～5世紀）、奄美・沖縄の島々には広田遺跡に特有の貝製品やその模倣品が出土しており、また広田遺跡にも沖縄地域と共通する貝製品が登場することから、両地域間には、人の往来のあったことが推測される。先史人が海上を長距離にわたって移動する場合、自活用の食器として、あるいは交換品のコンテナとして土器を携えていたことは、九州弥生人の貝交易において弥生土器の甕や壺が奄美・沖縄にひろく残されていることから明らかである。土器班では、同様のことが広田人にもいえるのではないかとこの予想のもとに、種子島産の土器の動きを奄美・沖縄地域において追った。

種子島産の土器を探す手がかりは、3～7世紀の大隅諸島で使用された甕形土器（大隅諸島系土器）の型式の特徴と、胎土に雲母を含むという技術的な特徴である。ただ型式による探索については、判断可能な部位が口縁部と底部にほぼ限られ、奄美・沖縄地域におけるこれまでの報告例も稀であることから、本研究でも事例数の大幅な増加は望めないことが予想された。そこで奄美・沖縄地域において貝符の出土が顕著な遺跡を選択して出土土器を悉皆的に調査し、これと併行して大隅諸島系土器の型式の特徴を再確認し、編年上の位置付けを改めて検討することにした。胎土による探索については、メルクマールとされる雲母の有無だけでは種子島産とする厳密な判断基準になりえないこと、破壊可能な試料が極めて限られていることから、小破片であっても土器の共通性を特定できる中性子放射化分析（NAA）を採用した。

1.2. 型式学的研究

石堂和博氏による土器の型式学的な整理の結果、大隅諸島系土器の編年は以下のように整理された。広田遺跡はこのうちの②から⑤に関係する。今回の編年案では、広田式古段階ならびに鳥ノ峯式新段階と使い分けられていた②が、後者の名称に統一されている。

- ①鳥ノ峯式古段階（弥生時代後期後半）
- ②鳥ノ峯式新段階（弥生時代終末期～古墳時代前期前半）
- ③広田式（古墳時代前期後半～後期前半）
- ④上能野式古段階（古墳時代後期後半～6世紀末）
- ⑤上能野式中・新段階（6世紀末～8世紀）

広田遺跡に対応する時期

具志堅清大氏は、奄美・沖縄地域の広田遺跡並行期の土器を、伊江島と久米島の遺跡を対象に集中

的に調査した。その結果、上記③の広田式以前において、伊江島具志原貝塚に種子島産土器に類似する甕が認められた。同④と⑤の上能野式期においては、久米島の清水貝塚で、在地土器に上能野式土器の施文の特徴が伝わっていることが確認された。これと併行して既に公表されている類似例を全ての図・写真において点検した。こうした一連の調査から具志堅氏は、奄美・沖縄における大隅諸島系土器の影響は「かなり低い」とする結論を導いている。注目されるのは、④の上能野式土器に併行する兼久式土器に、広田遺跡上層貝符に共通する文様が、奄美群島においてしばしば認められることである。この現象は沖縄諸島に一部も及んでいる。

人の移動に伴って搬入されたはずの土器の影響が目立たず、貝符が在地土器の施文デザインに影響を及ぼしている点は、九州弥生人の貝交易と著しく異なる点であり、広田人の移動の実態や貝殻入手行為の理解に重要なヒントを与える。

1.3. 胎土分析による研究

中性子放射化分析（Neutron Activation Analysis：略称 NAA）は、日本ではまだ実施例の少ない胎土分析の方法である。これは試料に中性子を照射して核反応を起こさせ、試料内の核種を同定し元素を定量する原理を応用した分析方法で、土器の一部をわずか（100mg）に破壊するが、高精度の結果が得られる点に特徴がある。担当した篠藤マリア氏とヨハネス・シュテルバ氏によると、この分析で抽出された土器胎土内の微量元素が生産地特定の「指紋」の役割を果たし、土器同士の異同関係が個別別に直接比較できるという。ただこの方法が有効であるためには基本となる遺跡の土器の「指紋」の種類が準備されていなければならない。

今回、保管機関の協力を得て、広田遺跡の土器36点、鳥ノ峯遺跡の土器6点、具志原貝塚の土器4点の、合計46点を分析することができた。NAAによる初めての実施であったため、基礎的な「指紋」の抽出に終始した感があるが、以下のようにこの段階における相応の成果を得た。

- ・ 広田遺跡の土器において、「指紋」になり得る4グループを検出した。北側墓群では1グループ、南側墓群では3グループが検出され、両者にまたがるものはなかった。
- ・ 鳥ノ峯遺跡の土器において、「指紋」になり得る1グループを検出した。
- ・ 具志原貝塚の土器は、これらのグループと対応しなかった。

広田遺跡の北側墓群と南側墓群は、時期と埋葬様式を異にする関係であるため、双方の胎土グループが独立的な関係とみられる点は示唆的である。今後分析数をふやすことで、奄美・沖縄地域を含んだ広域において、個別具体的な関係が見えてくるであろう。分析の継続が必要である。

2. 貝製品の彫刻技術

2.1. 研究の方法

広田遺跡下層で出土する貝符は、二つの意味で私たちを驚かせる。一つは文様の美しさ、いま一つは彫刻の技である。均整のとれた左右対称の文様は完成度が高く、半肉彫りの彫刻は熟達の技術を感じさせる。貝符班では後者（技術）に注目して、彫刻方法と工具の復元を目指した。山野ケン陽次郎氏は、貝符表面の彫刻の痕跡について、肉眼観察によって特徴を整理し、これを踏まえてデジタルマイクロスコープによる3次元計測データで工具痕跡を可視化し、これを彫刻行為に対応させることで技術の復元を図った。比嘉保信氏はアンボンクロザメを入手してこれを石材で方形に截断し、鉄、鉄石英、メノウ、硬質砂岩、サヌカイト、石英、チャートを用いた自作の工具によって貝殻表面に下層タイプの貝符を模した文様を彫刻し、素材による有用性の違いや工具としての適性を探った。

2.2. 彫刻技術の復元

山野氏は、彫刻痕跡の分析から、刃先形状による3種類の彫刻工具を想定し、彫刻時の断面形状、彫刻機能の対応を以下のように整理した。

- ・刃先が丸みを帯びる丸刀：貝符表面の断面形状は浅いU字状をなし、もっとも頻繁に使用される。
- ・刃先が方形の平刀：貝符表面の断面形状はごく浅い凹字状をなし、面、角、段の削り出しに使用される。
- ・刃先接地面が細い三角刀。貝符表面の断面形態はV字状をなし、線、境界溝、三角形の彫込みに使用される。

以上をふまえて、琉球列島で出土している広田下層式貝符19点について彫刻痕跡を検討し、下層期・古段階の貝符（山野分類の広田下層式Ⅰ類）については「両地域の彫刻技術が体系的には同じ枠組みで捉えられる」が、下層期・新段階（同上広田下層式Ⅱ類）では「彫刻技術に地域差」が生まれていることを指摘した。下層期・新段階は奄美・沖縄全域に貝符が分布する時期である。この時期に技術的な地域色が奄美・沖縄地域で生まれていることは注目される。

2.3. 彫刻工具の復元

比嘉保信氏は、山野氏と協力しつつ、広田遺跡下層のC地区5号人骨に伴った貝符（T171、T172、T173）について製作実験を行った。以下彫刻の刃先に使用した素材ごとに結果を示す。

- ・鉄：和鉄では硬さが不足。コンクリート釘に焼きを入れ、刃先を加工して丸刀5種、三角刀、平刀各1種を準備し、T171を模造。彫刻は可能だが、直進の彫込み時にやや問題あり。
- ・鉄石英：平刀と丸刀を数種類準備し、T171を模造。彫刻は容易だが折れやすく、頻繁な刃部再生が必要。三角形の彫込みはできない。
- ・メノウ：平刀と丸刀を数種類準備し、T173を模造。彫刻は容易だが折れやすく、頻繁な刃部再生が必要。三角形の彫込みはできない。細く薄い刃先の製作が可能。
- ・種子島産硬質砂岩、屋久島産石英、二上山産サヌカイト、沖縄本島産チャート、北海道産黒曜石：平刀と丸刀を数種類準備し、さまざまに試しながらT172を模造。石英による刃先の製作は困難であった。硬質砂岩、サヌカイト、チャートによる彫刻は可能。ことにチャートは刃先が長持ちした。

以上から、貝符の彫刻工具の刃先には、鉄ならびに石材の使用が可能であることが明らかになった。この結果は、鉄製の刃先を期待した我々の当初の考えを改めさせ、石器の有効性を認識させることになった。

今回の結果を踏まえると、広田人は鉄器と石器の両方を適宜使い分けて貝符を作成していたと考えるのが妥当であろう。しかしこれについては、山野氏の指摘を含めて、以下についてさらに詰めてゆく必要があるだろう。

- ・下層貝符と厳密に同じ形状の彫刻痕跡の再現が、石製刃先で可能か。
- ・3～4世紀の種子島に、彫刻に耐える硬度をもつ鉄器が存在したか。

3. 広田人とその移動

3.1. 研究の方法

広田人の人体の追究は、本研究の重要な柱である。人類学では、人骨の悉皆調査検討による形質人類学的調査と、人骨のストロンチウム（以下 Sr）同位体比分析を実施する二つの方法をとった。前者においては、高椋浩史氏、米元史織氏により出土人骨すべての個票が作成された。第1次～第3次

調査で出土した人骨の計測値等は、九州大学によりすでに公表されているが（九州大学医学部解剖学第二講座編1988「九州大学医学部解剖学第二講座所蔵古人骨資料集成」『日本民族・文化の生成2』）、今回は具体的な残存状況を含めた個体別情報が提示された。この作業を通して第1次～第5次調査において出土した人骨にかんする研究成果が再評価され、新たな所見が示された。

Sr 同位体比分析は、広田人の移動の痕跡を把握する目的で実施した骨の分析である。Sr は岩石に比較的多く含まれている元素であり、Sr 同位体比は、その同位体⁸⁶Sr と⁸⁷Sr の存在量の比（以下⁸⁷Sr/⁸⁶Sr）を用いて示される。地質の Sr は水やその水を摂取する動植物を通して人体に取り込まれ、歯はその形成時期である幼少期に生育した場所の⁸⁷Sr/⁸⁶Sr 値をある程度反映するとされている。今回、九州大学アジア埋蔵文化財研究センターに設置されている量分析装置を使用し、歯の中で4歳以下に形成されたとみられる箇所を選んで測定した。主体的に分析したのは、広田人21体であるが、比較のために鳥ノ峯人6体、椎ノ木人1体を加えた。さらに在地（種子島）の⁸⁷Sr/⁸⁶Sr 値を得るために、広田遺跡で出土した動物骨（シカ、イノシシ、サル）の分析も合わせて実施した。作業は、足立達朗氏をはじめ米元氏、高椋氏、岩永省三氏を中心としたチームによって行われた。

3.2. 骨からみた広田人の形質的特徴

今回の所見は、広田人の骨を対象とするこれまでの指摘を踏まえつつ新たな知見を加えたもので、以下のように整理される。

- ・全体に著しい短頭である。
- ・頭蓋変形が多い。具体的には、後頭部の扁平形状、ラムダ縫合における過剰縫合、頭蓋骨の小孔・陥凹が認められた。
- ・満身創痕の1個体が認められた。C地区8号人骨（熟年・男性）の右寛骨は骨折後治癒、右側前頭骨は陥没、全ての手脚に変形性関節症、ことに左右の膝と大腿骨は重傷、頸椎と腰椎に変形性脊椎症を患う。
- ・このほかに頭に傷をおった個体が4体認められた。N2号西側人骨（熟年・男性）とC地区4号人骨（熟年・男性？）の後頭部中央が陥凹、A地区8号人骨（成年・男性）の前頭骨中央部に深い破裂傷、C地区5号人骨（成年・女性）の前頭骨左側に深い破裂傷が認められた。
- ・脚を骨折する個体が2体認められた。DⅨ地区1号人骨（成年・男性）の膝下骨折、N2号西側人骨の太もも骨折が認められた。
- ・栄養状態は他地域の集団に比べるとやや悪い。
- ・全体に華奢で、あまり厳しい労働はなく男女の活動差も大きくない。手首の回内外に作用する諸筋が発達している。

広田人は長さ（奥行き）の短い頭をもち、身長の高い華奢な体形の集団で、食生活はあまり豊かではなかったが、激しい労働は少なく、船をこぐ動作の多い生活を送る人々であったとみられる。人工的な頭の変形や、故意に歯を抜く独特の風習をもつことが特徴で、その容貌はかなり特徴的であったと推測される。注意したいのは、頭に深い傷をおった人物や、全身を著しく損傷する人物の存在である。その多くが治癒しているところを見ると、外傷の原因は内的な対立というより外的なもので、集団間の緊張が激化した状況も予想される。広田遺跡の北16.5kmにあって広田遺跡と密接な関係をもつ鳥ノ峯遺跡では、骨に刺さったままの磨製石鏃を伴う埋葬事例が確認されている。鳥ノ峯人に磨製石鏃の副葬習俗が盛んであることを考慮すれば、集落間の緊張関係は日常的だった可能性がある。

3.3. Sr 同位体比分析の成果

人骨28体、動物骨7個を対象に Sr 同位体比分析を実施し、これらについて波形分析を行った結果、

Sr 同位体比の値0.70883から0.710171までの間に以下の4つのクラスターが析出された。これらは、在地の値（動物骨の値）を基準に、以下のように色で区分された（本書第Ⅱ部第3章1、276頁）。

黄：在地の値よりも低い重みづけ平均値を示す個体

青：在地の範囲に平均値が収まる個体

緑：在地の値よりも平均値は高いが一部重複している個体

赤：在地の値よりも平均値が高く誤差もそこから外れる個体

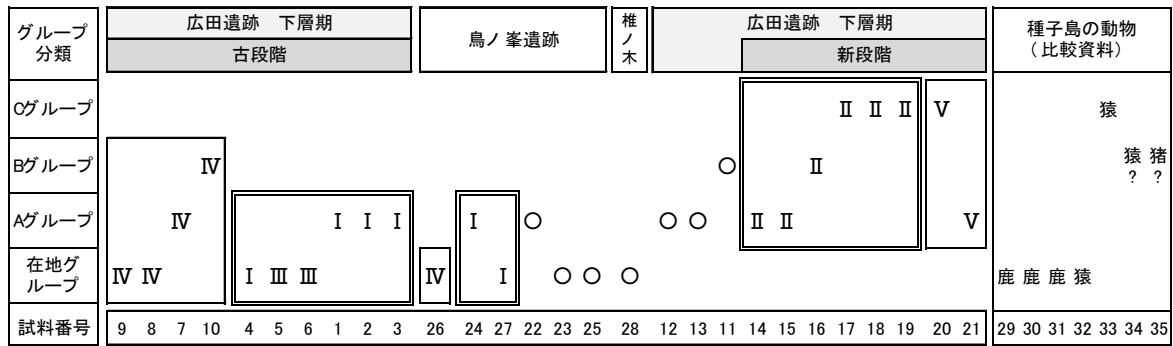
米元氏等は、この区分に考古学による装身具ならびに時期区分名を加えて二つのグラフに表示し、以下を指摘した。

- ① 墓地形成の初期に属する北区1号人骨は在地の幅に収まる。
- ② 広田遺跡下層の古段階でも新段階でも同じ時期に3つ程度のグループが存在している。
- ③ 下層期・新段階で、青に属する個体がなくなり、新たに赤に属する個体群が出現する。この個体は現段階では鳥ノ峯遺跡・椎ノ木遺跡出土人骨には見られない。
- ④ 鳥ノ峯3次C、B、6号墓bは広田遺跡周辺にその出自をもつ個体群の可能性が考えられるが、最終的には鳥の峯遺跡周辺から出土した動物の歯牙の検討などを待って結論を出す必要がある。
- ⑤ 広田遺跡周辺で生まれ育った人が椎ノ木遺跡に埋葬された可能性がある。
- ⑥ 広田遺跡周辺において、下層期では抜歯形式が出自表示となっていた可能性がある。（広田の古段階では青色、新段階では赤色の個体群が左側抜歯であり、鳥ノ峯では左側抜歯しか確認されておらず、椎の木でも左側抜歯が確認される。）
- ⑦ 広田遺跡下層の新段階において、赤色に属する個体群が新たに出現する点は重要である。
- ⑧ 下層期を通じて安定的に存在するのは黄色、 $87\text{Sr}/86\text{Sr}$ 値が低い個体群であるという点も重要である。

①から⑧は、広田人の集団を理解する上でいずれもきわめて重要な指摘である。これについて、装身具との関係から若干の検討を加えておきたい。図1は、米元等による図5（本書第Ⅱ部第3章1、276頁）をもとに、人骨試料の順番や $87\text{Sr}/86\text{Sr}$ 値による黄～赤の個体群表示を一部変更して作成したものである。装身具よる分類は、図1の付表で示すように、貝符の有無によって三つ（貝符をもつグループ、貝符をもたず貝輪をもつグループ、貝符も貝輪ももたないグループ）に分かれ、さらに貝符と貝輪の内容によってⅠ～Ⅵ類型に分けられる。図1では、貝符をもつグループ（貝符グループ）と、貝符をもたず貝輪をもつグループ（貝輪グループ）をそれぞれ枠で囲んで示した。なお、図1では鳥ノ峯遺跡の no.22と no.23が広田遺跡（下層期古段階）より古くなることを除けば、遺跡ごとのまとまりとして左が古く右が新しい。

以下図1を見ながら、①から⑧について装身具分類との関係をみてゆこう。

- ① 墓地形成の初期に属する北区1号人骨は在地の幅に収まる。：図1では no.9である。
- ② 広田遺跡下層の古段階でも新段階でも同じ時期に3つ程度のグループが存在している。：古段階では在地グループ・Aグループ・Bグループ、新段階ではAグループ・Bグループ・Cグループ。
- ③ 下層期・新段階で、青に属する個体がなくなり、新たに赤に属する個体群が出現する。この個体は現段階では鳥ノ峯遺跡・椎ノ木遺跡出土人骨には見られない。：新段階では在地グループがなくなり、代わりにCグループが加わる。
- ④ 鳥ノ峯3次C、B、6号墓bは広田遺跡周辺にその出自をもつ個体群の可能性が考えられる。：



凡例
 ・ 貝符をもつ (貝符グループ) 貝符をもたず貝輪をもつ (貝輪グループ) ○ 貝符も貝輪も持たない (VI類)
 ・ I～VIは装身の類型 (付表参照)。
 ・ グループ分類は、Sr 同位体比 (87Sr/86Sr) の分布傾向による。米元ほか (本書第Ⅱ部第3章1、276頁) の内容と、以下のように対応する。
 在地グループ：青の個体群、Aグループ：黄の個体群、Bグループ：緑の個体群、Cグループ：赤の個体群。
 ・ 試料番号は、米元ほか (本書第Ⅱ部第3章1) 図5に基づき、左から右に順にふっている。本表では編集のために位置をいれかえている。

図 1-1 Sr 同位体比にみる広田人・鳥ノ峯人・椎ノ木人

試料番号

1 C地区11号人骨	11 DⅡ地区5号人骨	21 C地区4号人骨
2 C地区5号人骨	12 EⅣ地区2号人骨	22 2次調査14号人骨
3 DⅡ地区4号人骨	13 EⅡ地区2号人骨	23 2次調査7号人骨
4 DⅢ地区2号人骨	14 EⅣ地区1号人骨	24 3次調査A号人骨
5 A地区10号人骨	15 A地区7号人骨	25 3次調査C号人骨
6 DⅠ地区5号人骨	16 A地区1号人骨	26 3次調査B号人骨
7 A地区11号人骨	17 DⅠ地区4b号人骨	27 3次調査6b号人骨
8 A地区9号人骨	18 N1号人骨	28 椎ノ木遺跡人骨
9 北区1号人骨	19 C地区12号人骨	
10 C地区8号人骨	20 EⅢ地区2号人骨	

付表 広田遺跡下層の貝製装身具による被葬者の分類

分類	類型	装身具分類			
		貝符の分類		貝輪の分類	
貝符をもつもの	I	貝符あり	彫刻あり	方形貝符 台形貝符	分類せず
	II		彫刻なし		
	III				
貝符をもたず貝輪をもつもの	IV	貝符なし			オオツタノハ腕輪
	V				オオツタノハ腕輪 +ゴホウラ腕輪
貝符も貝輪も持たないもの	VI	なし			

変化の方向：I⇒II、IV⇒V

詳細は、本書第Ⅱ部第3章2、表5・図5を参照のこと

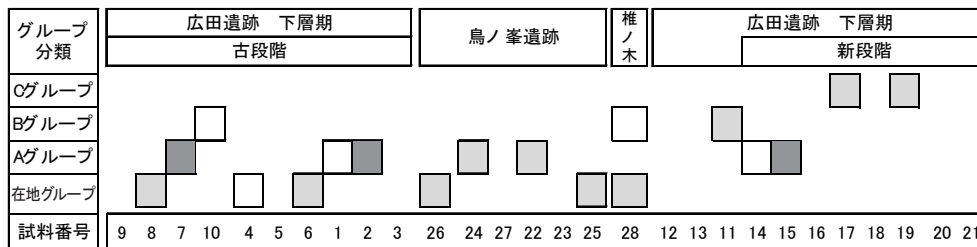


図 1-2 Sr 同位体比にみる広田人・鳥ノ峯人・椎ノ木人と抜歯

図 1 Sr 同位体比の分析

no.25、26、27が対応する。

- ⑤ 広田遺跡周辺で生まれ育った人が椎ノ木遺跡に埋葬された可能性がある。：no.28が対応する。
- ⑥ 広田遺跡周辺において、下層期では抜歯形式が出自表示となっていた可能性がある。：Aグループ以外において、抜歯は左側に限られている (図1-2)。
- ⑦ 広田遺跡下層の新段階において、赤色に属する個体群が新たに出現する点は重要である。：新段階におけるCグループの登場は明確である。
- ⑧ 下層期を通じて安定的に存在するのは黄色の⁸⁷Sr/⁸⁶Sr値が低い個体群であるという点も重要である。：Aグループが継続していることは重要。

以上を踏まえ、Sr 同位体比分析で析出された4グループ等について現段階でいえることをまとめておこう。

- ・ 在地グループは、下層期・古段階では、腕輪グループ・貝輪グループともにすべての装身類型を含むのに対し、同新段階では在地グループが消え、Aグループ・Bグループ・Cグループだけで構成されるようになっている。この傾向が全体の変化を正しく反映しているとすれば、集団構成の大きな変化とみられ、その意味は大きい。
- ・ Aグループは $^{87}\text{Sr}/^{86}\text{Sr}$ 値がもっとも低い集団で、在地グループを挟んでBグループとCグループに対峙しており、装身具では一貫して貝符をもつグループが圧倒的である。抜歯については、Aグループにのみ右側抜歯があり、他のグループが左側抜歯で占められるのに比べると対照的である。Aグループは⑧で述べられているように「下層期を通じて安定的に存在する」一群で、広田遺跡における中心的集団とみられる。ただ、Aグループでは自身と同じ $^{87}\text{Sr}/^{86}\text{Sr}$ 値をもつ在地の動物骨が広田遺跡で得られていない。この点には注意が必要であろう。
- ・ Bグループは、在地グループに近い同位体比をもつがこれとは区別されている小さな集団である。ここには満身創痕のC地区8号人骨と貝符グループの1例ほかの3例が属する。C地区8号人骨にはマクラガイ珠19個が伴っている。この玉が沖縄地域に古くからある在地の装身具であることをふまえると、Bグループは沖縄に関係していた可能性がある。
- ・ Cグループは、新段階で新たに登場する集団である。4例はそれぞれに豊富な貝製品を伴うが、3例がヤコウガイ容器をもち、ゴホウラ腕輪の総数は36に達する等、奄美・沖縄地域との密接な関係が窺える。
- ・ 鳥ノ峯遺跡は在地グループを主体とする集団である。図1-1からは、ここに広田遺跡から貝符グループと腕輪グループの一部が入り込んでいることが読み取れる。

3.4. 埋葬と装身習俗からみた広田遺跡の始まりと広田人の移動

木下は、広田遺跡開始期の埋葬習俗と装身習俗について分析し、広田遺跡の始まりと広田人の移動について以下をのべた。

広田遺跡は、弥生時代終末期から古墳時代初頭並行期に、オオツタノハ腕輪をはめヤコウガイ匙を副葬する在地墓制（覆石墓）を継承する人々が、砂丘北側に埋葬されることで始まった墓地である。最初の腕輪の着装は、九州人のオオツタノハ需要に対応して導入された可能性がある。

古墳前期～中期初頭並行期になると、腕輪グループの人々に加えて、貝符、竜佩、大量の貝製玉類の装身習俗をもつ人々が、配石墓等固有の埋葬習俗を伴って加わり、砂丘南側に墓地をつくり始めた。ここから、広田遺跡の南側墓群に、相互に異なる習俗をもつ2グループの人々の共同の墓地が形成されるようになる。

貝製装身具の製作には、種子島近海および奄美・沖縄の貝殻が大量に消費された。貝類採取に動いたのは、種子島の覆石墓と奄美・沖縄にのこる墓地をみる限り、腕輪グループの人々であった。初期の採取対象地は種子島全島で、西北の離島である馬毛島にも及んだ。やがて彼等の採取地は貝類のより豊富な吐噶喇列島、奄美群島に至りさらに沖縄諸島に広がった。沖縄本島西北の伊江島は、広田人が継続して出向いた大型イモガイ採取地の一つであった。鳥ノ峯遺跡にはその後半期に、広田人の南下に関わったとみられる人々の墓地が残されている。

広田人の頻繁な南下によって沖縄貝塚人との交流が生まれ、沖縄では広田人特有の貝符や竜佩を模倣した貝製品が登場した。一方広田人の装身具にも沖縄の伝統的なマクラガイ珠が普及し、腕輪グループの中には沖縄的な貝符や竜佩の模倣品をもつ人々も現れた。種子島人の埋葬習俗にも、沖縄に

多い二次葬や墓を上重ねる習俗、シャコガイを添える行為が見られるようになる。こうした中で、奄美大島に貝類採取の継続的な中継地ができる。小湊フワガネク遺跡はそうした拠点とみられ、続く広田上層期にはここで貝符の製作も始まる。

貝符グループに特徴的な装身習俗（彫刻をもつ貝符・竜佩の使用、頭飾り、耳飾り、玉類の大量消費）と埋葬習俗（側臥葬、配石墓等、二次葬）は、それ以前の種子島の習俗との連続性を欠いている。これらの登場については、金関丈夫氏以来の「外からの文化移入」に要因を求める考えがある一方で、近年では、近隣地域との交流を背景に種子島で生み出されたとみる考えが、複数の研究者から提示されている。木下は、在地文化との不整合を根拠に、前者の可能性もなお検討していく必要があると主張する。

4. 今後に向けて

広田人が奄美・沖縄地域の貝殻をもとめた3世紀から7世紀は、九州・西日本の古墳人たちが奄美・沖縄地域に大型巻貝を求めた時期でもある。琉球列島の海域には広田人と古墳人に繋がる二つの消費流通が行き交っていた。大型巻貝を求めた後者の流通は、消費者・運搬者・生産者の分業による弥生時代以来の交易スタイルを基本にしていたとみられるが、前者の広田人による貝殻入手はこれとはかなり異なり、消費者が直接産地に赴くスタイルであったことが予想される。二つの違いを見極める鍵の一つは土器の動きである。今回実施したNAAによる胎土分析は、消極的な動きに留まるこの時期の土器の移動についてピンポイントの情報をもたらす効果的な方法である。さらなる成果を得るため、継続的な情報の蓄積が望まれる。

貝符の彫刻に鉄の刃と石の刃が併用されていた可能性を指摘できたことは、今回の研究の成果の一つである。厳密な検証には今少しの作業と地道な追究が予想されるが、現代人が広田人の技術に迫るのは容易でない、ということであろう。

広田集落の登場が近隣集落との緊張を伴うものであったとすれば、装身具を飾る華やかな人々のイメージはかなり変わってくる。3世紀は九州・西日本でも社会のまとまりが大きく変化する時期である。日本列島の歴史に種子島や広田遺跡をより積極的に位置付けることが、次の作業になるだろう。

今回のSr同位体比分析によって分け入ることのできた広田人集団の内実は、極めて興味深いものであり、この分析の有効性を示すものであった。分析結果を充実させることで明らかになることは多い。この方面の今後の進展を期待したい。

今回の共同研究では、各班の作業に併行して、南種子町の協力のもとに広田遺跡ミュージアムにおいて広田遺跡にかかわる啓発・普及活動を実施した。今後は、本書で示された研究成果をひき続き地元還元してゆくことになる。一般の方々に内容をどう伝え、いかに関心を引き出し、考える楽しさを共有できるかが、共同研究のメンバーに与えられた次なるもう一つの課題であろう。